

藪の中 日本赤軍

エリック・ボードレール + ナイーム・モハイエメン

2020年2月9日(日)~3月8日(日)

12:00-19:00 *金土日のみ開廊

助成: 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

後援: 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本

アサクサは、エリック・ボードレールとナイーム・モハイエメンによる二人展『藪の中 日本赤軍』を開催いたします。近代政治における無国籍状態、政治的ユートピアとその反動の歴史、過去の出来事と記憶から呼び戻されるイメージの召喚、ドキュメンタリー映像と感情=記憶の接続など、共通の関心を多くもつ二人のアーティスト。それぞれ異なる経緯から、同時期に70年代の日本の急進左派がもたらした衝撃とその遺産について考察を深めてきました。『藪の中』と題された本展は、国際政治史に深く刻まれたこれらの出来事を、ダッカ、ベイルート、東京という異なる文化圏の視座から多角的に検証し、そうした事件における事実認識や主張を、一義的な真実として捉えること難しさを描き出します。

安保闘争を主導した過激派集団の赤軍派メンバーは、国外における根拠地を探し求め1969年頃から次々と日本を発ち、世界革命の地政学的戦略を構想しました。なかでもパレスチナ解放人民戦線(PFLP)と連帯した重信房子が率いる日本赤軍(1971-2001年)の攻勢は、遠征的・ステルス的手段によって、民間航空機ハイジャックや大使館占拠など、国家権力を麻痺させ投獄された同志の救出を図りました。差し迫った危険な状況下、異なる政治的コンテキストと地理空間を行き来する絶え間ない移動によって、彼らの本来の意図はイメージやテキストの上で絶えず誤読されるリスクを抱えていたと言えます。冷戦構造の影響下にある国際的な報道メディアが、事の真相を一面的にしか捉えなかったことは想像に難くありません。

エリック・ボードレール(1973年生まれ)の《重信房子、メイと足立正生のアナバシス そしてイメージのない27年間》(2011年)は、過去の記録を持たずに逃亡生活を送ってきた母子と、撮りためたリールを闘争の混乱の中で失った映画監督の歩みが交差するイメージ喪失の物語です。ベイルートへの亡命から日本への帰還・幽閉に至るまで主人公が語るモノローグの上を、映画のフレームは彼らが生きた都市や郊外の景観に沿ってゆき過ぎます。一連の風景が社会の細部に遍在する権力構造を明るみに出す(風景論)に基づいた本作は、発色の柔らかいスーパー8フィルムによって撮影されました。敵陣地を横断しやすらうギリシャ軍撤退の物語[2]を参照しながら、人影もない風土の心風景のなかにテレビ番組や映画の抜粋が挿入され、記憶(そして虚偽の記憶)や証言が、革命的プロパガンダや映画理論に混ざり合う主人公の複雑な内面世界を描いています。

ナイーム・モハイエメン(1969年生まれ)にとって、70年代とはアーティスト自身にとって、そして独立後間もない彼の祖国バングラディッシュにとっての形成期でした。お気に入りのテレビ番組を待ち望んでテレビ画面を覗き込む8歳のモハイエメン少年が見たのは、何の動きもない空港管制塔を捉えた固定カメラの映像です。《United Red Army》(2012年)は、ダッカ日航機ハイジャック事件(1977年)[3]における100時間におよぶ人質交渉の音声テープをもとに、黒い画面に色鮮やかなテキストのみが躍ります。日本人のたどたどしい英語とバングラディッシュ側の交渉役である空軍司令長官の自信に満ちた対応を対照的に浮かび上がらせることで、政治的および対人関係の緊張をいっそう強調し、この歴史的イベントに対する複雑な反響をイメージ不在のままに黙想させます。日本赤軍はパレスチナの大義を標榜し汎アラブ主義に行き着きましたが、1977年のバングラデシュは彼らが思い描いた「第三世界」とは異なり、突如軍事クーデターが発生して急展開を迎えます。

国際主義の綻びの中で、社会の「異分子」による不協和音のコミュニティは、新たな共鳴のかたちを探さなければなりません。支配的で均質化された言説に対し、現実を規定する基盤そのものを変革する方法を、どのようなかたちで模索しようのでしょうか?リスクを冒してその方策を思考する場合は、学問的、文化的言説の中にどれほど残されているのでしょうか?それを語るために、人目を避けて地下で根を張り巡らすオルタナ空間に退却する必要があるのでしょうか?あるいは、その「犯罪性」のために言及することすら棄却されるべきなのでしょうか?こうしたすべては、制約なき創造性や理想主義的な意志が孕む功罪であり、周縁において思考する芸術の可能性をめぐる問いなのです。

『藪の中 日本赤軍』は、東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京による助成により実現いたしました。